

主イエス命名の日 ルカ 2 章 15 - 21 節

〔直訳〕

- 15 そして 起こった 立ち去ったとき 彼らから 天の中へ 天使たちが、
羊飼いたちは 語っていた お互いに、
「私たちは行き着こう さあ ベツレヘムまで
そして 私たちは見よう この起こった言葉（レーマ）を
ところの 主が 知らせた 私たちに」。
- 16 そして 彼らが行った 急いで
そして 彼らは見つけ出した
マリアとヨセフを そして飼い場桶に乳飲み子が寝ているのを。

- 17 だが見て 彼らは知らせた
語られた言葉（レーマ）について 彼らに この幼子について。
- 18 そして 聞いた者は皆 驚いた
語られたことについて 羊飼いたちによって 彼らに対して。
- 19 だがマリアは すべて 大切にしていた これらの言葉（レーマ）を
よく考えながら 彼女の心の中で。

- 20 そして 戻った 羊飼いたちは
栄光をたたえながら そして 賛美しながら 神を
すべてのことに関して
ところの 彼らが聞いた そして 彼らが見た
それらが彼らに対して語られた通りに。
- 21 そして 満たされたとき 八つの日々が 彼に割礼を施すための
そして 呼ばれた 彼の名は イエスと
呼ばれたもの 天使によって 彼が宿る前に 胎の中に

〔新共同訳〕

- 15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせ
てくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行って、マリア
とヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いた
ちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18 聞いた者は皆、羊飼いた
ちの話の話を不思議に思った。19 しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡
らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神を
あがめ、賛美しながら帰って行った。
- 21 八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に
天使から示された名である。

① 構成

① a 15 | 16 節

⑦ 15 節の「そして起こった…」はルカが好んで用いる構文である。「そして起こった」の後に、時を示す表現と出来事を示す表現が続く。「天使たちが去ったとき、羊飼いたちは互いに語っているということが起こった」という意味になる。一種の強調表現で、段落の冒頭や物語の頂点にこの構文が使われる。この構文によって、物語が重要な場面にさしかかったことを暗示している。

① 羊飼いたちは、主が自分たちに知らせた「言葉（レーマ）を見よう」と言って、ベツレヘムへと向かう。その「言葉」はすでに「起こった」とあるように、出来事となって現れている。

⑦ 16 節の「急いで」は、ルカ 1 章 39 節では、天使からイエス誕生の予告を受けたマリヤがエリサベトのもとに走るときに使われている（ルカ 1 39 では前置詞句であり、ここでは動詞の分詞形が用いられている）。ここでも天使からイエスの誕生を告げられた羊飼いに使われている。「飼葉桶に寝ている」は 7 節にも 12 節にも使われ、イエスの居場所を示すしるしのような役割を演じている。

① b 17 | 19 節

⑦ この段落では現場に到着した羊飼いの告知とそれに対する反応を描いている。それぞれの動作とその対象とを抜き出すと

羊飼いは	知らせた	語られた言葉（について）
聞いた者は	驚いた	語られたこと（について）
マリヤは	大切にされた	言葉を

となる。「語られたこと」と「語られた言葉」の「語られた」はともに動詞ラレオーのアオリスト受動分詞である。

① 羊飼いの知らせを聞いた者の目が「語られた言葉」のうちの「語られたこと」に留まってしまふと「驚く」という反応で終わる。しかし、「語られた」という表面を突き抜け「言葉（レーマ）」にまで目が向かうと、「大切にされる」という態度につながる。17 節の「語られた言葉」を 18 | 19 節では「語られた」と「言葉（レーマ）」に分けることによって、聞いた者とマリヤの反応をくつきりと描き分けている。

① c 20 | 21 節

⑦ 主が知らせた「この起こった言葉（レーマ）」（15 節）を見るために出かけた羊飼いたちは、栄光をたたえ、神を賛美しながら生活の場に戻って行った。

① 八日後、幼子は天使によって呼ばれた名、「イエス」と名付けられる。

② 「起こったレーマ」（15 | 16 節）

① 15 節で羊飼いたちは「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか…」（新共同訳）と述べているが、これを直訳すると

私たちは行き着こう さあ ベツレヘムまで

そして 私たちは見よう この起こった言葉（レーマ）を
ところの 主が 知らせた 私たちに」。

となる。注目したいのは「レーマ」に「起こった」という修飾語がつけられていることである。ここでの「起こったレーマ」は「出来事となった言葉」の意味だろう。なぜなら、単に語られただけにすぎないレーマであるなら、17節のように「語られたレーマ」と表現するはずだからである。

㊦レーマという単語は動詞「語る（エロー）」からの派生語であり、まず「なにかの事柄や出来事について語る言葉や発言」を意味する。それは不注意な「言葉」、あまりに神聖で語ることできかない「言葉」、神を冒瀆する「言葉」になることもある。文脈によっては「預言・予告」になるが（使一 16 など）、新約聖書ではとりわけ神やキリストの「言葉」（マタ 4 4 など）、キリスト者の宣教の「言葉」に使われる（使 24、ロマ 10 8 など）。また、語られた事柄や出来事が強調される場合には、「事柄・出来事」の意味になる。二人ないし三人の証人の口によって「すべてのこと（レーマ）」は確定されるべきである（マタ 18 16、2 コリ 13 1）。

㊧羊飼いたちは「起こったレーマ」と語っているように、言葉が「出来事となっている」ことをすでに信じている。そうであれば、羊飼いがベツレヘムに向かった目的は、天使が告げた言葉の信憑性を確認するだけでなく、天使の言葉を皆に告げるためでもあるだろう。ちなみに、「私たちが行き着こう」と直訳した語デイエルコマイは、伝道活動のために「ある場所に向かう」という意味でも使われる言葉である（ルカ 9 6、使 20 25）。

㊨15節から20節では告げ知らせることに関する語彙が豊富に使われている。「言葉」と直訳したレーマが 15・17・19 節に現れる。さらに「語る（ラレオー）」が 17・18・20（15）節に、「知らせる（グノーリゾー）」が 15・17 節に、「聞く（アクオー）」が 18・20 節に、「見る（ホラオー）」が 15・17・20 節に使われている。主が「知らせた」レーマ（言葉）は、すでに出来事となったレーマであり（15節）であり、それを見た羊飼いたちは、今度は自らが皆に「知らせる」者となる（17節）。

㊩羊飼いたちは、告げられた出来事をただ確認するためだけにベツレヘムに赴くのではない。出来事を目にして、出会う人々によい知らせを告げるためである。天使から受胎告知を受けたマリヤが「急いで」エリサベトのもとに走ったように（ルカ 1 39）、彼らも「急いで」ベツレヘムに向かい、飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見出す。

③「語られた」「レーマ」（17—19 節）

㊰彼らは乳飲み子を見出すと、天使によって彼らに「語られたレーマ」を皆に知らせる（17節）。「語られた」は動詞ラレオー（語る）の受動分詞である。同じ語の同じ受動分詞が 18 節にも使われているが、ここでは「語られたこと」というように名詞形として使われている。羊飼いかから聞いた者が「驚いた」対象は、「語られたレーマ」ではなく、ただ「語られたこと」である。それに対して、19 節にはマリヤの反応が描かれ、「レーマ」を大切に心に納めたとされている。

㊱羊飼いたちは「語られたレーマ」について知らせるが、驚くことに終わった人々の視線は「語られたこと」に留まっている。しかし、マリヤの視線はそれを通り抜け「レーマ」にまで達し、そ

れを心の中で「よく考えながら、大切にしていた」という姿勢を生み出している。

④ 出来事となった神の言葉（20—21節）

① 語られた通りにすべてを見聞きした羊飼いたちは、神の栄光をたたえて賛美しながら、戻って行く。彼らが神を賛美するのは、神は語った言葉を必ず出来事とすることを、実際に見聞きしたからである。天使から「聞いた」ことを告げた羊飼いたちは、天使によって語られたことを実際に「見て」、神を賛美する者となる。宣教者とは聞いたことを告げ、その正しさを見て神を賛美する者のことである。

② 誕生から八日後、割礼の日に幼子は天使によって呼ばれた名、イエスと名付けられる。

そして 呼ばれた 彼の名は イエスと
呼ばれたもの 天使によって 彼が宿る前に 胎の中に

マリアは生まれる子を「イエス」と名付けるようにと天使から命じられた（ルカ 1—31）。このイエスの誕生を告げる場面にも「言葉（レーマ）」が用いられている。受胎を告げられて戸惑うマリアに、天使は「どんなレーマも、神には不可能ではない」と語り（ルカ 1—37）、マリアは「あなたのレーマに従って、私に起こりますように」と答える（1—38）。イエスの誕生を告げる神の言葉（レーマ）は出来事となって現れ、幼子は神の言葉の通りに「イエス」と呼ばれる。

⑤ イエスは神の救いを現す

① イエスの降誕を真つ先に知らされたのは、政治権力者でも宗教権力者でもなく、社会的地位のない羊飼いたちであった。主の降誕を天使から知らされた羊飼いたちは、「起こった言葉（出来事）」を見に行く。羊飼いたちは天使が告げた「言葉」がすでに「起こっている」ことを確信している。彼らは救い主の誕生を見て、それを人々に告げるためにベツレヘムへと向かう。彼らは救い主の誕生を知らされた最初の者であると同時に、救い主の到来を告げる最初の宣教者となる。羊飼いたちを動かしている力は、神の言葉は必ず実現するという信頼である。

② 降誕という神の「出来事」が伝達される過程で、それを受けた者はさまざまな反応を取る。羊飼いたちから聞いた人々は「驚く」。驚きは発見につながることもある。神であるひとり子が受肉したという「出来事」は人間理性から見れば驚きでしかない。しかし、ただ驚くだけで終わるなら、「出来事」の外で足踏みするばかりである。驚きが発見につながるためには、「出来事」を心にとめて、温める必要がある。

③ 「語られたレーマ」の表面に留まるなら、驚きで終わる。しかし、その内側の「レーマ」にまで目を向けようとして、それを温めて思い巡らすなら、そこに響く神の言葉に気づくことになる。「レーマ」とは出来事となる言葉であり、出来事となった言葉である。マリアは「レーマ」を温め続けた。マリアの神の言葉に対するこの姿勢を持つことを、神は人に求めている。

④ 神の救いは「飼い場桶に寝ている」乳飲み子に示されている。幼子イエスは神の救いを現す者である。しかし、神が与える救いの意味を人はすぐには悟ることはできない。そうであれば、神の言葉を心の中で「よく考えながら、大切にすること」が必要である。問い続けること、それはいつか知る時が来ることを信じて、神を信頼して生きることである。